

二〇〇九年を振り返って

岸野 あき恵

二〇〇九年は日本で初紹介となる作家の作品や、新人作家のデビュー作が目立った。また、YAのレーベルを創刊した出版社があったこともあり、YA作品が多数翻訳された。

まず、低・中学年向けの作品では、『どうしてぼくをいじめめるの?』（ルイス・サッカー はらるい訳 文研出版）は、いじめっ子にありもしない噂を流されていじめられるようになってしまったマーヴィンが、いじめっ子の嘘を逆手にとって皆の信頼を取り戻す物語。いじめの集団心理とそこから脱出法がよく描かれている。スウェーデンのヨーナ・アウトエイオのデビュー作『フランクとぼく』（菱木晃子訳 あすなる書房）のフランクは家庭環境も良くなく、大人

からはとんでもないいたずらっ子だと思われて眉をひそめられているが、「ぼく」はフランクにおもちゃを壊されることはあっても、フランクの本当のよさがわかっている。この年代の子どもの気持ちをよく捉えた一冊である。

奇想天外で子どもらしい空想に満ちた作品では、『天才少年ダンボール博士の日記 宇宙船をつくれ!』（フランク・アッシュ 白井澄子訳 ポプラ社）の主人公は、ダンボールで宇宙船を完成させ、うるさい弟のいない世界へ脱出しようとする。ダンボールで作った発明品で誤って弟をマイクロ化してしまったり、自分のコピー人間を増殖させてしまったりと愉快である。『ママ・シヨップ』（セシ・ジェンキンソン 斎藤静代訳 主婦の友社）では、わがままを聞いてくれないママに腹を立てた主人公が「ママ・シヨップ」でママをほかのママと交換してしまう。あとで本当のママを取り戻そうと思っても、ママのほうにも子どもの条件を指定する権利があり、お互いの希望がマッチングせず、なかなか帰ってきてもらえない。

次に、困難の中で生きる子どもたちを描いた作品では、障害を扱ったものがあつた。どれも自分のハンデを理解して、自分自身と折り合いをつけていく様がよく描かれている。『リーコとオスカーともっと深い影』（アンドレアス・シュタインヘーフェル 森川弘子訳 岩波書店）のリーコは物事を考えるのに人の倍の時間がかかり、右と左の区別が苦手